

1. 調査の経緯

(1) 調査の動機

城郭石垣普請に関する研究は主に、①採石工程・②運搬工程・③石垣構築工程の3工程に分けることができる。各作業工程に即して具体的に復元していくことが求められている。⁽¹⁾ ①採石工程は、調査研究事例が蓄積しつつある。③石垣構築工程は、全国的に研究が進展している。①、③の2工程に対し、②運搬工程はほとんど研究が進展しておらず、特に石材の海運に関して実態は不明である。運搬工程を明らかにできれば、採石から石垣構築まで研究成果が接続し、城郭石垣研究全体の進展に資する。

研究代表者らは、小豆島にて石切場調査を進める中で、石切場沿岸を簡易的に調査したところ、海中に相当数の石垣石材を発見する機会に恵まれた。しかし、機材の不足により調査内容が不十分にならざるを得なかった。そこで、2017年度公益財団法人福武財団瀬戸内海文化研究・活動支援助成（調査・研究助成）に申請することで、学術的に価値のある調査を実施し、記録化することによって成果を地域と共有することとした。

(2) 調査の目的

本調査研究は、なぜ香川県小豆島が石垣石の一大供給地となったのか、海運の面からアプローチするものである。近世大坂城石垣普請の際、小豆島において、各大名は足軽や日用を送りこみ、高度な採石技術を駆使し巨石を切り出し、膨大な石垣石材を供給した。しかし、もう一つの大規模供給地の兵庫県東六甲山系と比較すると、小豆島は大坂には遠く距離的に不便である。しかし、海運の拠点でもあった近世小豆島や瀬戸内海島嶼部は、大きな海運力を保持しており、海上輸送によって距離的不利を解決した。とりわけ巨石を大量に大坂まで海上輸送するには、高度な海運技術と船腹量が不可欠となる。本研究は、この巨石の海運技術を明らかにすることである。特に石切場と海上輸送の結節点である船積み工程に着目し、石材の船積み遺構の実地調査に取り組む。

調査地とする小豆島岩谷石切場は、採石した陸上部から石材を船積みした海岸部まで当時の状況がそのまま残っている。近世石切場を解明するフィールドとして、一級の遺跡である。しかし、国史跡と指定された1970年代以降、石切場の本格的な調査は実施されておらず、海中の調査は当初から実施されていない。海中調査によって既存の石切場遺跡としての評価に新たな学術的評価を付与できるであろう。全国的に海岸部は開発によって、近世当時の船積み遺構は消滅しており、小豆島岩谷石切場の調査成果は、貴重なものになると予想される。

現代の小豆島の採石業においても、船運によって石材を遠隔地へ出荷している。前近代には和船による海運技術が発達し、自然地形を前提にした船積みをしていた。しかし、近代化によって船舶や船積み施設が機械化することにより、近世の技術が失われ、実態が不明となってしまった。今日の近代社会において、失われた技術や実態を明らかにするためには、遺構や船積み痕跡を調べる考古学的調査が有効であると考えた。

(1) 北野博司「近世城郭と石垣普請の実像 - 近年の研究動向と遺跡の保存 -」『日本歴史』696、2016。